

<3月> 「ちゅうりっぷさん、カメを任せたよ!」

○ねらい 季節の変化を感じる中で、生命の不思議さや尊さに気付いたり、責任をもって世話を年中児に引き継ごうとしたりする。

○内容 就学への憧れや期待感をもち、卒園までを考えたり見通しをもって遊びを計画したりする。

環境構成 保育者の援助

①冬眠中のカメの様子をいつでも見れるように、タライを保育室に置いておく。

②カメへの親しみや愛情をより感じることができるよう、カメが冬眠から目覚めた時の感動や嬉しさに共感する。

③年長児として世話を年中児に引き継ごうとする気持ちを受け止め、年中児と関わる様子を近くで見守る。

④世話の仕方が伝わる方法を考えたり、試したりできるように、材料や文字環境を整えておく。

①タライをじっと覗いていたハルが「動いた!」と大きな声で叫ぶと、年中児のヒロ、年長児のノノカが走ってきた。①ハル「モゾモゾって葉っぱが動いた!生きてる!」と大きな声で言う。ヒロ「どこ?」ハル「ここ!」と葉っぱが動いているところを指さして知らせ、ノノカが「ほんまや!起きた?」と言う。ヒロ「誰が起きたん?」ハル「カメが寝とってん」と興奮しながら教える。3人がしばらく見ていると、葉っぱの中から2匹のカメが首を伸ばした。ノノカ「おはよう!」と言って触ろうとしたが、葉っぱがとても臭くて3人は鼻をつまむ。ヒロ「なんで臭い?」ハル「ずっと寝とったから」ノノカ「葉っぱ替えてなかったから」と言う。②ハル「早く出したらなあかん」ヒロ「じゃあ、このタライに葉っぱ入れてくる」と言って別のタライを持ってくる。ノノカ「葉っぱはもういらないよ」ヒロ「なんで?」ハル「あったかくなったからもう葉っぱいらんねん」と答える。②ハル「そうや!ちゅうりっぷさんにお世話の仕方教えてあげよう。僕たちもうすぐ1年生になるから。僕たちも教えてもらったもんね」ノノカ「いい考え!」保育者「もうすぐ年長さんは幼稚園来なくなるもんね」と言う。③手洗い場に行ったハルが「ちゅうりっぷさん、こっちおいで」と手招きをして自分の隣の場所を空ける。皆でタライを持ち上げ、蛇口に近付ける。ヒロ「どのぐらい水入れるん?」③ハル「カメの背中がすこし隠れるぐらい」と伝える。ハル「ヒロくん、水出して。僕がストップって言ったら止めてな」と伝える。ハルとヒロは水の量を真剣に見ている。水を入れ終わるとハルが「次はエサをあげるねん」と言う。ノノカ「たくさんあげちゃだめだよ」ハル「6個ぐらいかな」と言いながらヒロの手の上に固形餌を6個置く。ハル「お世話の仕方わかった?」ヒロ「ちょっとだけ」と小さな声で言う。

④ハル「じゃあ、紙に書いてちゅうりっぷさんに渡すわ!」
と言い、世話の仕方を画用紙に書き始めた。

① たらいを動かす
② エサをあげる
③ まとく
④ さはかないで



内面の読み取り

①花の蕾が膨らみ始めたり、小虫が出てきたりしていることに気づき、季節の変化を感じていた。そのことから、カメが冬眠から目覚めることに期待を膨らませていた。

②カメの世話を通して、愛着が深まり、より大切にしたいという思いがあったからこそ、年中児に引き継ごうとする気持ちにつながった。

③知識や経験を年中児に分かりやすい言葉や合図で伝えようとし、年中児が自分でできるように見守ったり、手を添えたりした。そのような関わり背景には、年中児との関係が深まっていたことや思いやりの気持ちが育っていたことがある。

< 考察 >

ハルはこれまで大切にカメの世話をしていたため、3月にカメの目覚めは「生きていた!」と命が続いていたことの大きな喜びになった。卒園が近くなり、園内のことを年中児に引き継ぐ中で、大切にしていたカメのことをいつ伝えるのか保育者は気になっていたが、ハルの心が動くまで保育者は見守っていた。カメの目覚めが春の訪れと卒園をより実感するきっかけとなり、世話の仕方を自分で伝えようとする姿につながったのだろう。一生懸命に引き継ぐ姿からは、その必要性を感じ、年長児としての自覚や責任感が強くなっていく様子が伝わってきた。

< 幼児の学び >

- ・世話をする中で培ってきた知識や経験を年中児に伝え、年長児として自分が引継いできたものを引き継ごうとする責任感
- ・カメの命が続いている不思議さや尊さを感じ、より命を大切にしようとする優しさや思いやり

< 小学校の先生の気付き >



小学校の生活科では、生き物の育て方や、命の大切さを知る学習があるので、幼児期の学びが生かされるね。

子ども同士で気付き、教え合って学びを深めていくって大事だね。小学校でも主体的・対話的な学びを研究しているので、幼児期の学びが繋がっていると感じました。

